

6日目 7月21日

会 場： 松江市営球場

第2試合	～3回戦～																			
T E A M	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	R	H	E		
開 星	0	0	0	0	0	0	0	0	0							0	2	0		
石見智翠館	0	0	0	1	0	0	0	0	X							1	4	0		
(投手-捕手)																				
・ (開)	藤原主→横内 - 木原																			
・ (智)	山崎琢→山本由 - 上																			
(長 打)	(二塁打)						(三塁打)						(本塁打)							
・ (開)	藤原湊、松田																			
・ (智)	伊藤																			
(審判) [球審]	森島			〔一塁〕 本田				〔二塁〕 平安山				〔三塁〕 飯塚								
(チーム成績)																				
チーム	打	安	点	二	三	本	振	四	犠	盗	残	併	守	備	失	暴	ボ	逸	打	妨
(開)	26	2	0	2	0	0	7	3	3	0	5	0			0	2	0	0		0
(智)	26	4	1	1	0	0	10	6	1	1	8	1			0	0	0	0		0

「前回大会決勝カード対決は、石見智翠館に軍配！」

両高の対決といえは、前回大会となる一昨年(2019年)の第101回大会の決勝戦を思い出す方も多いのではないだろうか。開星が9回表2死1塁から連続本塁打で3点差を追い付き、更に延長13回表にも左中間への2点本塁打で勝ち越したが、その裏に石見智翠館が連打と四死球で3点を奪いサヨナラで甲子園行きを決めた試合だった。今年のチームも春季大会の3回戦で対戦しており、その時は11対1の6回コールドで石見智翠館が開星を下している。

この試合は手に汗握る投手戦となった。先制点が結果的に決勝点となったが、その先制点争いは中身の濃いものであった。まず、好機を作ったのは石見智翠館だった。1回裏に2死から四球で走者1塁とし、4球目の真ん中付近に入った直球を4番上が捉え、左線ポールギリギリで切れる本塁打性のファールを放つ。暴投で走者2塁に置いたが、ここは見逃し三振で0点だった。

対する開星は直後の2回表に連続四球で1死1・2塁としたが、空振り三振で2死となり、8番木原が変化球を捉えるも三直で得点には至らなかった。更に3回表には、1死から1番藤原湊がチーム初安打となる左線2塁打を放ち、犠打で2死3塁とするも、3番田中が見逃し三振に倒れ、再び石見智翠館のエース山崎琢に防がれる。逆に石見智翠館はその裏、2つの死球で1・2塁とするが開星エースの藤原主の前に、後続が連続三振に倒れ得点できない。

4回表に先頭の4番松田が右中間を破る2塁打でチャンスを作ると、犠打で1死3塁とした。相手の内野が前進する中、2B2Sからスクイズを敢行するも、ファールとなり先制点の最大のチャンスを逃した。

すると、4回裏に好投する山崎琢がチーム初安打となる右安を放ち、暴投で2塁へ進む。そして、7番伊藤が2球目の変化球を捉え、中堅手の増田が打球に追い付くものの弾き、先制点兼決勝点となる適時2塁打となった。

開星は5回表にも先頭の四球を起点に4度目となるチャンスを作ったものの、ここも山崎琢が踏ん張った。6回からは左変則の山本由が継投し、無四死球無安打と完璧な投球で反撃の機会すら与えなかった。開星は2つの暴投で走者を進めてしまったのが痛かった。

